



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## グローバルな ワカモノを育てる

先日中国地方のある町の商工会青年部から、まちづくりに関する講演の依頼があり、青年部というので久しぶりに、若い人に会えることを楽しみ出かけて行きました。しかし行ってみると集まった人は、「えっ本当に青年部の集まりなの?」と首を傾げたくなるような、中には五十代の人もいてすっかり困惑してしまいました。青春とは心の若さですから例え五十歳でも自分で若いと思えば若いのでしょうか、「ワカモノ」とは一体何歳までの人を言うのでしょうか。私が青年団活動をしていた頃は、田舎にワカモノがゴロゴロ溢れていた時代でしたから、中学校を卒業すると進学せず直ぐに実社会へ出て働いたり、高校くらいで学業を終える人が殆どで、二十五〜二十六歳くらい

が適齢期とばかりに結婚して青年団活動から足を洗い、PTAや消防団・自治会などの地域活動に軸足を置き換えていました。

ところがその後地方から都会へと人口移動が始まり、都会は過密、地方は過疎という構図が出来上がると、地方ではワカモノの数が急激に減り続け、僅かな人数のワカモノさえも地域への関心を示さなくなつて、当時のワカモノがいつまで経っても未だに地域の活動を背負い続けているのです。ゆえにワカモノの年齢的概念は二十代から三十代へ、三十代から四十代へと、中国地方の商工会青年部がそうであるように、大きく後退を余儀なくされているのです。

地域支えのワカモノを育てるのは誰の責任か?と問われたら、多分「それは行政」とか「それは団体」と答える人が多いかも知れません。しかし一番は何といつても地域づくりの基本は家庭で、自分の家の後継者を作ることです。昭和三十年代まで日本の地方は、農業や漁業といった第一次産業は勿論のこと、商業も長男が家業と全財産を継ぐという風潮がありました。ところがこうした産業は三K産業(きつい・汚い・金にならない)として、やっている親さえも「こんな仕事は私一代で沢山」と自分の職業を否定し、向都

離村の教育をし続けたのです。唯一都会を目指したものの都会の目まぐるしい生活に夢破れて帰郷し、役場や農協といった職場に身を委ねた人が、都会を目指さなかった意志の強い長男組とともに、かろうじて地方の今を支えているのです。

家の後継者を作ることは、働き口と生活のレベルを高めなければそんなに難しいことはありません。地方の民家は二世代や三世代が同居できるだけの許容能力を持っていて、わが家も只今松山で働く息子家族と同居し、一つ屋根の下に長男四人(親父・私・息子・孫)が住んでも、都会より広いお互いのプライバシーを守れる空間が確保できているのです。考えようによつては都会のごみごみした所で暮らすより、どんなに伸び伸びと暮らせることでしょう。

「田舎は考えが古いから嫌だ」とか、「田舎では飯が食えない」とか言つて、田舎を捨てて都会へ行くワカモノがいると思えば、最近では世の中も少し変わりました。あるようで、「子育て」というキーワードで田舎暮らしをしたいという、物好きとも思えるワカモノが増えてきました。子どもの数が減つて廃校になりそうな田舎では、渡りに船とばかりに移住促進を目論んでいます。いが住むとなると、かなりのハードルを越えなければならず、

双海のイベントにはワカモノの参加が多い



紆余曲折がありお互いがヤキモキしているようです。

さてワカモノを育てるには、私がそうであったようにワカモノの組織化と、異文化ギャップに触れさせることが何より大事です。私は青年団活動で①仲間、②主張、③ふるさと、④感動、⑤夢という五つの道具を手に入れました。また第十回総理府派遣青年の船で太平洋を渡り、建国二百年のアメリカ・メキシコへ行き、世界地図の真ん中に日本がないことに気がついたり、異文化ギャップを体験することができ、その後の自分の人生の基礎を作りました。ゆえに自分の体験を基に様々な分野でワカモノ育てをしてきました。日本一のまちへ毎年十人のワカモノを十年間送り込んだ「人づくり十年計画」

や、海外と国内の先進地へ毎年十人のワカモノを派遣した「新・人づくり十年計画」は、まさに異文化体験と外から自分や自分の町を再発見する大きな大きな旅でした。平成の大合併によってその計画は潰れましたが、まちの未来は今が過去になる前に、ワカモノの心にどれだけ希望の火をともしせるかが勝負のような気がするのです。

私はこのように行政職員として長年ワカモノ育てに携わってきましたが、退職後一民間人となつてからも、瀬戸内海が一望できる標高百三十メートルの山の中腹に、ワカモノを育てる研修施設を自費で建て、子どもも大人も、勿論ワカモノも含めて人づくりを実践しています。かつてのようなワカモノだけに特化した人育ては人数が少ないゆえ望むべきもなく、異文化・異業種・異年齢・異性・異地域・異精神の集合体の中でワカモノを育てることも意味があると思ひ、体験塾や年輪塾などを定期的に開催して、新しい時代に相応しい地域づくりの後継者を育成しようとしています。

今地方は過疎と高齢化と少子化、それに産業不振という四重苦にあえぎ、このまま放っておくとまちやむらが潰れそ

うな予感さえする、かつてない危機に直面しています。歴史を紐解けばその現象は、激しい人口減少と冷害や風水害に見舞われた二百年前の北関東地方の実態とどこかよく似ていて、年輪塾でこの二年間学んだ二宮尊徳の生き様を思う時、その気になれば地方で起きている諸問題は豊かな時代ゆえに、解決できないことなどないのではないかと思うのです。そのキーワードはいつの時代も「ワカモノ」の後継者です。

「足は野につき心は天に向かつて開く」ようなグローバル（グローバルローカルを組み合わせた私の造語）人間を作りたい。そんな淡い夢を持って今も人間牧場で沢山の仲間とともに学びを行なっています。

「五十歳 ワカモノですか？ 首かし  
げ 青年部会 講演頼まれ」  
「何よりも まずわが家から 足元  
を 固めて後継 作るそこから」  
「ワカモノを 育てなければ 将来  
は 地方潰れて 跡形もなし」  
「グローバル 両方持てる ワカモノ  
を 育てるために 一生懸命」  
(若松進一 笑売唆阿より)